世界動物文学全集

13

大草原のリーモ
小さな奇跡
都ブルーレの一生
シンバ

世界動物文学全集

13

講談社

世界動物文学全集13　大草原のリーモ
小さな奇跡
貂フルーレの一生
シンバ

昭和54年11月18日　第1刷

著者　スタンレー・E・ブロック
ポール・ギャリコ
エルネスト・クレース
マーチン・E・ジョンソン

訳者　藤原英司
古沢安二郎
岩淵達治

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号112
電話東京（03）945-1111（大代表）　振替東京 8-3930
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
定価　1500円

©藤原英司　古沢安二郎　岩淵達治　1979年
Printed in Japan
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
0397-405137-2253（0）　（文2）

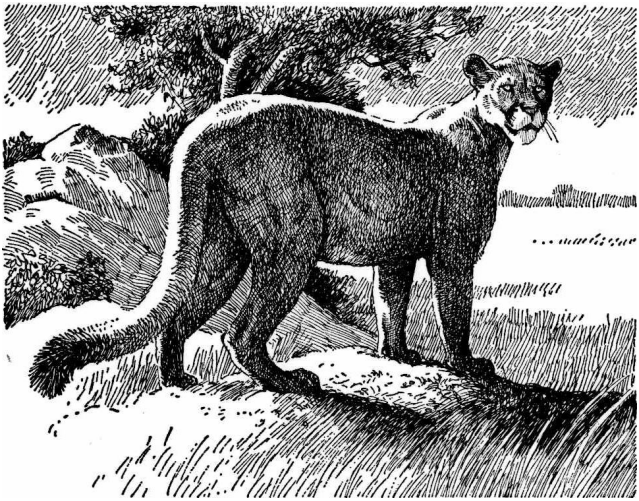
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

大草原のリーモ　5
小さな奇跡　177
貂フルーレの一生　197
シンバ　231
解説・藤原英司　373

装幀　蟹江征治

イラスト　田中豊美



大草原のリーモ

S・E・ブロック
藤原英司訳

LEEMO: A True Story of a Man's Friendship With a Mountain Lion

by

Stanley E. Brock

Copyright © 1967 by Stanley E. Brock

Japanese language anthology rights arranged

with Stanley E. Brock

c/o John Farquharson Ltd., London

through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

1　南米の大草原

南米大陸には、奇妙ではあるがまたじつにすばらしい哺乳動物が満ちている。しかもそのうちのいくらかは、ほとんど人に知られておらず、なかには、まだ人間に発見されていないものも、いるようだ。

アマゾン河の流域は広大な原始林におおわれ、熱帯性サバンナと山地を擁し、世界で最も外界と隔絶された動物の宝庫となっている。ここでは、自然自身が監視官をつとめる。はいりこもうにも、通路のないすさまじいジャングルや、いたるところで大地をただれさせている無数の沼地が、自然を文明の侵略から守っているのだ。だから、ここでは、自然の中へ侵入しようとする文明の力は、ただのむなしいあがきのように見える。

自然科学者たちは、この堅固な城の周辺へはいりこむ。ある者は飛行機を使って、がたがたの荒れさびた滑走路へ舞いおり、またある者はカヌーを使って、無数に張りめぐらされた水路を伝わって、広大なジャングルの周辺にはいりこむのである。だが、そうやって来てみても、かれらが観察しようと思っている動物たちは、事実上、どこにも見当たらない。

どこにでもいて目にふれるのは、サルだけである。美しい色彩にいろどられた赤毛のホエザルは、じつに大きな声で鳴きわめく。この声は現生する野獣のうちでも、最も大きな声に属すのではなかろうか。とにかく、このホエザルは、南米に棲息する霊長類のうちでは、最大のものである。

ホエザルと同じくらいの大きさのものに、クモザルがいる。黒いもしゃもしゃの毛におおわれたサルで、木から木へ軽々と飛び移っていく姿は、まさに美しい〝動きの詩人〟とでもいおうか。しなやかにくねる把握力のある尾は、第五の足とでもいいたいくらい、みごとな働きをみせ、ほかの手足と区別がつかないくらいである。

長いひげをつけたようなサキザルは、厚い毛におおわれた太い尾をもち、何か考えこむような顔つきをしている。そのようすは、いつもわたし達に、知人や友人の誰かを思いださせずにはおかない。

このサルの親類筋にあたるものに、シロガオサキザル、およびグレーター・キャプチンとレサー・キャプチンと呼ばれるオマキザルがいる。グレーター・キャプチンは〝ウォウ、ウォウ、ウォウ〟という声で鳴き、インディオは、このサルをウォウと名づけている。

また黄色い小人を思わせるリスザルもいる。体が小さく、簡単に手に乗るくらいの大きさで、河ぞいの叢林でふつうに見かけるサルである。群居を好み、よく百頭以上の群れをなして移動する姿を見かける。

リスザルと同じくらいの大きさの、マーモセットという小さいサルもいる。これはリスザルとは科が異なり、他の霊長類とはあまり近親性がない。清潔好きで優美であり、ユニークなサルで、人手に飼われると、最も利口なペットとなる。

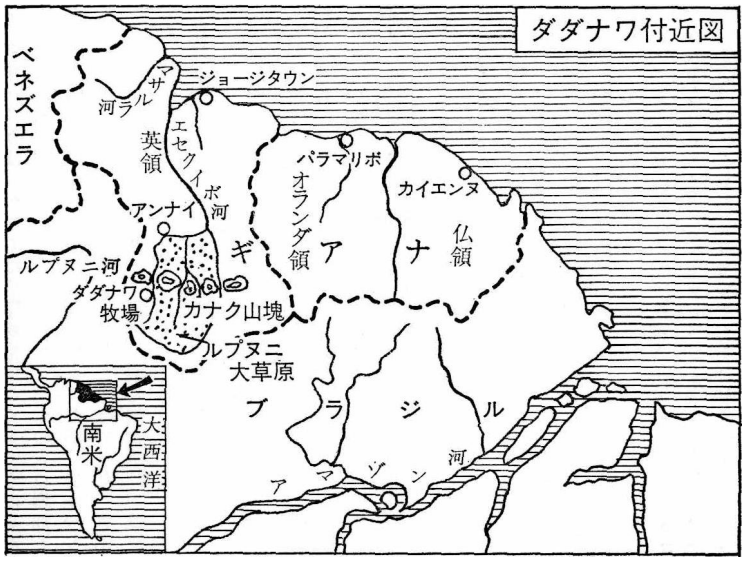
英領ギアナのルプヌニ大草原は、アマゾン流域の北東端に当たる地方にひろがっている。そしてこの中を流れる河や小川の半数以上が、アマゾン河へ流れこんでいる。他の川は、ギアナで最大の河をなすエセクイボ河の支流を形成する。このエセクイボ河の流れは南北千キロにわたって流れ、事実上、英領ギアナ全土を縦に二分してしまっている。また大草原も、東と西に横たわるカナク山塊によって、ほとんど二等分されている。山は深い森林におおわれ、ここには、二種族のインディオが居住している。北部のマカシ族と南部のワピシャナ族である。この両種族は、過去五十年間に、さまざまの入植者を通じて、なんらかの形で、文明界の基底部と接触を保ちつづけてきている連中である。

この地域は牧場地帯であるが、地味は乏しく、無機物も不十分で二キロ半平方の土地に、わずかに十頭の牧牛を養いうるに過ぎない。牧牛は足が長く骨張っている。もともとスペイン系のロングホーンのタイプであるが、これは他の優秀な牧牛を輸入して交配することによって、じょじょに改良されつつある。たとえば、ヘレフォードとか、サンタ・ガートリュード、ブラーマンといった優良牧牛との交配が行なわれているのである。

ルプヌニ地区での最大の牧場は、ダダナワにある。六千五百平方キロにおよぶ南部大草原を擁し、二万五千頭の牧牛と、数百頭のウマを飼っている。

わたしがこの牧場へ来たのは、まだ十七歳の子どもの時だった。そして、ここで毎日、荒っぽい野生馬に乗る男たちの叫びや、荒れ狂う雄ウシを縄にかける危険な作業を見るうちに、それらの野生味にあふれた生活に、しだいに魅せられていった。

当時わたしは、そのような荒っぽい作業については、どのような技術が必要なのか、まったく知らなかった。また不注意と経験不足が、じっさいの作業において、どのような災難をもたらすものかということも、わからなかった。だが、その後、しだいに経験を積み、二、三回、骨折を経験しただけで、どうやら危険を回避する技術を身につけることができるようになった。今でも、相当荒っぽいウマに乗ることがある。また言うことをきかぬ牧牛を投げ縄で捕らえることもある。最初はすべて、ゲームとして始めたことだった。だが、今ではそれが日常の仕事となってしまっ



た。

だが、わたしがこの英領ギアナへ来たのは、ウシを飼うためではなかった。わたしは自然界のあらゆるものに魅せられてやってきたのである。

わたしがダダナワの牧場に職を得たのは、まったく偶然だった。そして、この職には、はからずも初めから南米の動物たちを研究する機会が無数に付随していたのである。

まずこの土地へきて最初に驚いたのは、とほうもない種類と数の鳥だった。だが、それからしばらくするうちに、哺乳類もずいぶんいるのだということに気づいた。そうとわかるまでに時間がかかったのは、哺乳類の大部分は夜行性で、昼間、わたし達の目にふれることが少ないからだった。

哺乳類でも、むろん夜行性でないものがいる。先にあげたサルの仲間がそうだし、非常に珍しい部類にはいるがヤブイヌもそうである。ほかにカワウソ、ペッカリーがいた。ペッカリーには二種類ある。大きいのと小さいので、小さいほうは首が白く(クビワペッカリー)、いつも五、六頭で群れをなしている。大きいほうは〝ホワイト・リップ〟と呼ばれ(クチジロペッカリー)、群れは百頭をこえることがよくあり、時におそろしく気が短く、すぐ暴れることがある。

だがこれらの哺乳動物も、開けた大草原(サバンナ)にはすんでいない。サバンナで見かける哺乳類の種類はごく限られてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

る。オジロジカは、かつては草原地帯でごくふつうに見かけた動物だった。しかし今では、インディオの人口増加とともに、いやおうなしに減ってきている。だが、アルマジロ、ハイイロギツネ、オオアリクイなどは今でもたくさんおり、またアナグマやイタチに似た小型の肉食獣は、草原でよく見かける。

森林地帯の大自然が、ほんとうに自然らしい活気をていするのは、夜である。夜の世界にまず登場する動物にパクがいる。内気で警戒心が強く、サイやウマに近い有蹄獣で、見かけも両者のあいのこのように見える。南米の野生動物のうちでは最大のもので、体重は二百三十キロに達し、すごい力もちである。日照りになると山の森林地帯で暮らし、またふだんは川や沼地でも不自由を感じないという、まことに適応性に富んだ動物である。

赤と灰色のマザマジカ（ブロケットジカ）というのもいる。小型のシカで尖ったスパイク状の角をもち、ずんぐりした毛深い体をしていて、びっしり入り組んだ下生えの中を、巧みにすり抜けて歩く。

カピバラは現存する齧歯類中、最大のもので、体重は四十五キロをこえ、巨大なネズミといった感じの動物である。

ほかには、アライグマ、ハナグマ、キンカジュウ、カコミスル（リング・ティルド・キャット）、パカ、アグーチ、ヤマアラシ、またイタチの仲間のタイラ、南米で唯一の有袋類といわれるオポッサムがいる。このオポッサムは、カンガルーのように、腹の袋に子どもを入れて運ぶが、変種が多く、ギアナだけで少なくとも十六種類の異なったオポッサムが報告されている。

ぶかっこうな、ナマケモノも忘れてはなるまい。これにはフタユビとミツユビの二種類がいる。ナマケモノにとって、もっとも恐ろしい天敵は、鋼鉄のような爪をもった世界最大の猛禽、オウギワシである。

また妖怪のように空中を飛び歩く哺乳類に、さまざまのコウモリがある。まるで悪鬼のようなチスイコウモリ（吸血コウモリ）、また、魚を食うウオクイコウモリがいる。このコウモリはよく発達した鋭い爪をもっていて、水面を音もなくかすめながら、ぼんやりしている小魚をつかみあげる。南米にいるコウモリはじつに多くの亜種に分かれ、その種類は他のいかなる動物の種類にもまさるくらいである。

こうした多くの野生動物の世界を、わがもの顔に歩きまわるのは、大型のネコ科の動物である。なかでも、自他ともに君主の座を占めるのは、全身に斑点をもつジャガーである。陸棲のネコの仲間のうち、木に登るものとしては、最大のものである。つぎに体の大きさは二番目だが、スピードでは第一に位する機敏で優雅なピューマがいる。このピューマは、アマゾン流域ばかりでなく、北は遠くカナダまですみ、南は南米南端のパタゴニアまで分布している。

オセロットは信じられぬくらい美しく優雅な縞と斑点をもった動物である。またジャガランディというネコ科の動物もいるが、体は小さく、色は黒いのと、褐色のがいる。細長い体をし、イタチを思わせる長い首をしている。

またマーゲイというネコ科の獣もいる。これはオセロットに似ているが、ずっと長い毛を持ち、体の大きさもオセロットの半分である。

これらのネコ科の動物は、いずれも孤独を好み、冷酷なハンターとして、ジャングル中の動物たちから恐れられている。

だが、いったんこれらの動物を本格的に研究しようとすると、相当の困難が伴う。たとえば、森林地帯の一キロ平方の土地に、どれだけの数の動物がいるのかということさえ、明確につかむことはできない。むろん大型の獣については、足跡で判定することもできるかもしれない。しかし、その他の獣にいたっては、調べようがない。

この大きな障壁をのりこえる方法として、わたしは、さまざまの異なった種類の動物を集め、それらをならして、しかも牧場の中で自由に暮らさせるようにした。飼いならした動物を檻に入れないようにしたのはもちろんのこと、できるだけ気ままに暮らさせ、さらに、なるべく自然の状態に近い行動をとらせるため、自然環境をととのえなおしてやることも必要だった。

マンゴーの木には、いつもナマケモノを飼っていた。家の屋根の上にはクモザルやマーモセットがいたし、家の裏の湖には、バクやカピバラを飼った。また灌木林には、アルマジロやイタチの仲間のグリソンやタイラがいた。

だが、いろいろ飼った中で、もっともわたしが可愛がったのは、リーモと名づけたピューマだった。従って、本書も、このすばらしいわたしの友リーモのために書いた。

リーモは雌だが、飼い始めた当初から、ベアノと名づける雄のオセロットと、とても仲良くなった。リーモとベアノの友情は固いものだった。そして、これはジャングルにすむネコ科の種を異にする動物の関係として、きわめて珍しい友情というべきである。

ピューマという動物は、生まれつき非常に残虐な、殺戮を好む猛獣である。そして、わたしはリーモに、牧場にいる家畜を、むやみに殺させないよう、ずいぶん骨をおった。牧場はリーモのすみかであり、家畜はリーモの周囲に、いつもふんだんにいたからである。だが、そのようなわたしの努力は、いつも成功したとはいいがたい。常に何頭かのヒツジやブタが、牧場から姿を消した。

リーモのこうした悪いくせは、過去二年間のうちに、いっそう激しいものとなった。それは、リーモと同じように腕白で無責任な、しかしまた、リーモと同じくらい単純で憎めない五匹のごろつきが、仲間に加わったからである。それは四匹のヤブイヌの子と、一匹のディンゴである。ヤブイヌは、南米では、きわめて珍しい動物とされている。

四頭の名はジェリー、ジャック、フレッド、ジェニーで、この連中にかかると、アヒルやニワトリは、いつもびくびくしていなくてはならなかった。ディンゴはオーストラリアから連れてきたイヌだが、これがまた非行少年の代表みたいな動物で、たいていの悪行に、ほとんどいつでも連座していた。

野生動物を理解することは、みずからかれらの間に立ち混じって暮らしてみて、初めて可能になることである。そうやって暮らしてみると、かれらを理解するだけでなく、個々の動物たちの個性をも知ることができる。

アマゾン盆地にすむ動物は多い。小はコウモリから、大は猛獣ジャガーにいたるまで、それらの動物たちのすべてに、わたしは、本書を捧げたいと思う。

いろいろな人に世話になった。だがなかでも、牧場の中でリーモを飼うことを許してくれたルプヌニ開発会社には、心から感謝している。

2　リーモとの出会い

毎朝、四時か五時にわたしは目をさまして、ハンモックからおりる。すると、まず最初に聞くのが、雌のピューマの笛を吹くような、ミャーウという鳴き声なのだ。リーモの朝の挨拶である。リーモはどうも、わたしのことを、自分の夫とでも思っているようだ。

リーモは暗やみの中で、T型フォードのエンジンみたいな音をたてて、のどを鳴らしながら近づいてくる。そしてなめらかな赤っぽい四十五キロの体を、わたしの両足にこすりつける。わたしは体をかがめて、黄褐色の頭にさわってやる。だがまちがって、時どき、手をリーモの口の中へ入れてしまうことがある。リーモはしっかり口を閉じて、わたしの手首を噛むが、むろん皮膚を傷つけるようなことはない。そして、手首を放すと、つぎには荒いサンドペーパーのような舌で、わたしの腕をなめあげる。

わたしの家は、高い支柱の上に建っている。外には、わたしのウマが横木につないであった。今日はリーモを連れて行くことができない。わたし達は今日、牧牛を追いに行くのだ。ウシとピューマは、いっしょにするわけにはいかないのである。

わたしはズボンをはき、シャツを着ながら、リーモに、今日はこの部屋にいるんだぞと言いきかせた。ブラジル型の短い皮の乗馬ズボンをつけ、締め金をかけ、拍車をつける。その間、リーモはあと足で立ちあがって、前足でわたしの腰を抱きこみ、シャツの背中の部分を、夢中になってしゃぶっていた。シャツの背は、今までにも、もうさんざんしゃぶられて、すっかりよれよれになってしまっている。

わたしは家にいろよとリーモに言いきかせながら、やがてドアのところへ出ていった。そしてドアを開けるや否

や、リーモはたちまち、わたしの足の間をすり抜けて、外へとびだして行ってしまった。

さて、どうやって呼びもどしたものだろう？　ピューマを外の闇の中へひとりで出しておけば、必ずなにかめんどうをおこす。ピューマという動物は、生まれながらにして、殺しを楽しむ性質をもっているからだ。

百メートルほど離れたところに、ヒツジの群れを寝かせてあった。リーモが、そこへ行って、ちょっと〝遊んで〟みようと思うのは当然である。リーモがその誘惑に勝てないということは、わかりきったことだった。それは、わたしが過去において、高い代価を払って経験済みになっていることだった。

わたしは台所で、もう元気よくコーヒーをわかしているコックに呼びかけた。コックは気立てのいいアフリカ人の女性である。

「イレーネ！　肉の塊をひとつ持ってきてくれないか。リーモが外へでたんだ」

「おや、まあ！」

イレーネは、ため息まじりに大声で叫んだ。

イレーネは、わたし以外にリーモから特別に親しまれている唯一の人間である。だが、イレーネのほうでは、最近リーモをあまり歓迎しなくなっていた。それというのも、リーモがあまりふざけてイレーネにうしろからとびつくことが、何回も重なったからである。そのたびにイレーネは、突き倒されて、床に腹ばいにさせられた。

やがて台所のドアが、そっと用心深く開けられ、イレーネがおどおどしたようすで、新鮮な牛肉の大きな塊を持って出てきた。それから、いくらかびくびくしながら、家の前の段階をベランダへ上っていった。

これはリーモを家へ呼びいれる時、いつも用いる手で、今まで一度も失敗したことがなかった。イレーネは肉の塊を、ドアから、居間へ投げこむ。するとリーモは電光のようなスピードでそれを追って家へとびこみ、わたしは、すぐさまドアを閉じる。これでリーモは完全に家の中へ閉じこめられてしまうのだった。

わたしがリーモを手にいれたのは、まったくの偶然からだった。

今までわたしは十年以上もの間、牧牛を虐殺するピューマやジャガーを狩ってきた。しかし、自分で飼いならせるくらいの子どもには一度も出会ったことがなかった。

わたしは一度オランダ領ギアナへでかけて、未開の草地を調査し、原始的なインディオのトリオ族や、その周辺のジャングルにすむ野生生物の写真をとったことがあった。

やがてわたしは帰途についた。そして英領ギアナ南部のルプヌニ大草原をぬけて、ダダナワ牧場めざして進んでいると、突然、運命の女神が、わたしにほほえみかけたのである。

ルブヌニ大草原は広さ一万三千平方キロにおよび、英領ギアナの南西部境界地帯まで、ひろがっている。このルブヌニ大草原（サバンナ）というのは、そもそもブラジル北部に広がるより広大なリオ・ブランコ大草原（サバンナ）の一部なのである。名前が違っているのは、アマゾンの源流を構成するタカツ河とイレング河によって、ブラジルとギアナが政治的に分けられているからである。

ルブヌニ大草原は、貧弱な草地である。土地は主として白いサンド・リーフと赤っぽいラテライト、黒いグラナイトが混合したものから成っている。無機物の含有量は乏しく、そこに生える草もまばらで、第一章にも記したように、二・五キロ平方の土地に、わずかに十頭の牧牛を収容しうるにすぎない。

このあたりの大草原がルブヌニと呼ばれるのは、この草原全域を貫いて、ルブヌニ河が流れているからである。この河は、やがて草原がエセクイボ河に達する手前の森林の中で姿を消す。

なお、この大草原は、カナク山脈によって南北に仕切られ、北部サバンナと、南部サバンナに分かれる。そして入植者も、そのおのおのの部分に、べつべつに入りこんでいる。

わたし達はジョージタウンからダダナワまで、英領ギアナ航空会社のダコタ号で飛んだ。これは貨物輸送のため、個人的にチャーターされた飛行機である。こういう飛行機に乗る人間は、たとえ何人まとまっていようと、常に貨物の二の次にしか扱われない。そして機内に積みこまれた穀物の袋とか小麦袋の間や、電線の束、ジーゼル燃料のドラム罐の間、鳴きわめくブタの中や、ごろごろと鳴きつづけるシチメンチョウの間などの、どこでも体を入れられるところに、身をおちつけるのだった。

飛行機はとちゅうで北部サバンナの中にある草地の飛行場へおりた。アンナイというところである。そこにはもう相当数のマクシ族インディオが住み、牧場を経営する入植者もいた。その牧場経営者に引き渡す荷物や手紙類をおろしたのである。

飛行機は森林や山をこえて三百五十キロを、二時間かかって飛んだ。その間、飛行機はエアポケットでがくんと落ちるかと思うと、すぐにふわっと舞いあがり、しばらくすると、またつぎのエアポケットに、どかんとはまりこむということをくりかえしながら飛びつづけた。そのたびに、わたし達は胃がぐっとつかみだされるような、激しい衝撃を味わった。なんといっても衝撃のクライマックスは、翼を傾け、一気に高度を下げて着陸態勢にはいる時だった。結局、パイロットは最後には機体を水平にたてなおして、完全に着陸はするものの、最後まで、わたし達は、これでおだぶつかと観念するのだった。

その飛行機には客が二十六人乗っていた。そのうち十五人は子どもである。ルブヌニ地区に住んでいる人たちの家

族は、みんな子だくさんで、たいていが自分の子どもだけで、フットボール・チームが作れるくらい生む。飛行機に乗っていた子ども達は、紙袋をなんのために使うものかも知らず、また母親が子ども達を慰めるために大声でなにか言っても、エンジンの轟音のために、まったく聞こえなかった。そして、飛行機が着陸するころには、わたし達は、子どもが吐き散らした汚物の中に、立っている始末だった。

飛行機がとまると、わたしはまっ先にドアからとびだして、新鮮なサバンナの空気を、胸いっぱいに吸いこんだ。だが、それも束の間のことで、いつものように、たちまちその地方のインディオの大群に、わっと取り囲まれた。

マクシ族は典型的な南米のインディオである。広い肩と、がっしりした筋肉質の体をしているが、背は低く、一メートル七十センチ以上の背丈をもったものは、きわめて稀である。かれらはブラジル人および伝導師たちの教化を受け、西洋風の衣服をつけているが、それが、かれらの良さをすっかり傷つけていた。安物の汚いカーキ色のズボンやシャツはぼろぼろになって、だらしなく体にまつわりつき、その間からブロンズ色の肉体がちらちらのぞいている。いっぽう女たちは手製のドレスをまとっているが、これが地面から十センチぐらいのところまでたれ、腰からひざまでかくしているものと、胸までかくしているものがあった。

女たちの多くは赤ん坊をつれていた。みんな首にかけた吊り袋のようなものに赤ん坊を入れ、赤ん坊は、母親の胸に長くたれさがっている乳房にしっかりしがみついていた。

マクシ族の言葉は、音節のきれめがはっきりしない。そのため、時にかれらの言葉は、不明瞭な騒音がだらだらとつづいているように聞こえることがある。だが、それから急に語るテンポがゆるやかになり、短い、ほとんど発音不能と思われる叫び声のような言葉になる。白人でこの言葉をマスターしたものは、ほとんどいない。まして完全に喋れるようになった者は、ひとりもいない。だが、たいていのマクシ族は、片言の英語かブラジル系のポルトガル語を話すことができる。

わたしが原住民たちの群衆に囲まれていたのは、ほんの二、三秒にすぎなかった。わたしは少し離れたところにいる原住民たちの男の中に、ひとり、やせた小さな動物をかかえている男を見つけたのだ。ちょっと見たところでは、それはふつうの子ネコのように見えた。だが、体には不釣合に大きな前足が二本、折り曲げた男の腕の外へたれていた。大きな丸い目はうるんで、どことなく哀愁をたたえ、そのため、いかにも当惑したような顔つきに見えた。口を半分あけ、口の周囲には雪のように白い部分がある。体は煉瓦色で、不規則な黒い斑点があり、尾は体にくらべてすごく長く、そこにアライグマのような輪がついていた。

その動物をひと目みるなり、わたしは、それが長い間捜

し求めていたピューマの子だということがわかった。わたしは、すぐにその男のところへ歩いて行った。飛行機はそこで五分間とまるだけだったからである。

男はひどく酔っぱらっていて、そばへ行くと地酒の臭いがぷんと鼻をついた。その臭いから判断すると、男が飲んだ酒は、熱帯産ウルシ科の植物カシューの生ジュースを発酵させてつくったものにまちがいなかった。この酒は非常に揮発性の強いもので、もし高級ガソリンのメーカーが適当な処方をほどこせば、自動車レースに大革命をひきおこすかもしれないような液体である。

「でかいトラ。だんな、でかいトラだよ」

その男はよだれをたらしながら、スペイン訛りの強い英語で、だらしのない喋りかたをした。

「だんな、これ、買う？　ええ？」

男は言った。

その時、わたしはもうその子ネコみたいな動物を、自分の手に抱いていた。そして、す早くその動物がちゃんと足を四本もち、目が二つあり、尾っぽをつけていることを確かめた。雌だということもわかった。それだけの粗雑な点検を終えると、わたしは、いそいで聞いた。

「いくらだ？」

「二十五ドル」

男は激しい語調で宣言するように言った。

ポンドにすれば五ポンドだな、とわたしは思った。さいふには、ちょうどそのくらいあった。これは珍しいことだった。旅の終わりごろに、そんなに金が残っていることは、めったにないことだ。

「乗客の皆さん、乗って下さい！」

副操縦士が叫んだ。

わたしは急いで札束を酔っぱらいのシャツの胸元へ突っこみ、新しい友だちを抱きかかえて、飛行機にもぐりこんだ。

つぎの着陸地はレセムという小さい町である。この町は人口およそ二百人で、英領ギアナとブラジルとの国境にある辺境の町だった。そこで地区行政官と官憲の検査がある。アンナイからその町までは、飛行機で十五分だった。

わたしはいつも子ウマや子イヌの名前をつけるのに、とても苦労する。ところが、このよたよたした小さな動物を腕に抱いた時、ふしぎなことに、すぐリーモという名前が頭にひらめいた。どうしてなのか、理由はわからなかった。レオというのはライオンのことである。そこへMの字をはさんだのは、自分が手にした動物がピューマだったからだろうか。とにかくピューマは、南北アメリカでは、一般にライオンと呼ばれている。その二つが、一瞬わたしの頭の中でいっしょになり、リーモという名前が、できあがったようだった。

飛行機はドアを閉じると、すぐにエンジンが唸りをあげ、たちまち耳をろうするような轟音が機内に充満した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c